1

職員玄関の厚いガラスのドアを風景へ向かって押すと、どんでん返しに乗ったようにぼくの体は光を感じる。体の高さよりガラスは大きく、二階建の校舎をぐるりとガラスは囲んでいる。光は十分に校舎の中に届いているが、ぼくが光を感じるのは、いつもそこを出るときだった。

チャイムの音が響き、校庭に散らばる子どもたちは不意にひとすじの流れになる。流れ

の上のごみのようにもみありながら、彼等の玄関へ吸いこまれていくのだ。

子どもたちを呑みこんだコンクリートの校舎のまわりには、スポーツセンター、町民センター、国保病院などの大きな建物が建ち、建物を越えて、緑の丘が背景にそびえていた。左右に切りわけられたように、緑の削がれた部分がある。日本一長いと言われる滑り台を丘にはめこんだためである。緑から突き出た鋼色の塔は展望塔であり、その近くの幹を倒したキャンプ場は、手前の緑の厚さに隠れてわからない。丘の向こうの斜面にある屋外ステージも、こちら側からはわからなかった。

ステージ開きがあったのは、一年前のことだった。高名な女性フォークシンガーを町の文化協会が招き、前売券を持ってぼくも出かけた。

グリーンコンサートと称するその催しを、さして聞きたかったわけではない。妻の入っているアトリエの会が文化協会に所属しているために、四枚の前売券を彼女はわりあてられたのだ。隣の夫婦に二枚を売りつけ、ぼくら夫婦は、その隣の車に便乗して会場へ出かけた。

勾配の急な舗装道路は丘の裏手からステージのそばまで続き、腕章をつけた町の人たちは、ステージの背後の緑を刈りとってつくられた野球場に車を導いていた。ステージ前面の森はぬっぺりとした芝生になり、客は感触を尻で感じ、グリーンコンサートに聞き入るようになっていた。

森の枝がおびえるほどの楽器の音が黒いコードの先の大きな機械から轟き、真赤なドレスのシンガーがステージのかげからとびだしてきた。コップ酒をいきなりあおり、さあみんな楽しくやろうよと、彼女は高く手を上げて掌を叩きだしたが、それに合わせて拍

子をとる手はひどくまばらだった。
コンサートの中で、女性シンガーは、彼女の作詞作曲によるアイヌの恋の物語りを歌った。どんな物語りか、今はもう忘れてしまったが、彼女の歌った日本語の歌の枕にとり入れたアイヌ語の響きだけは、ぼくの耳に今もよみがえってくる。

ヘシロカニペ　ランラン　ピシカン
コンカニペ　ランラン　ピシカン！…

六十年前、十九才でこの世をさった一人のアイヌ、知里幸恵の「アイヌ神謡集」の中に残された言葉である。

銀の滴降る降るまわりに
金の滴降る降るまわりに

と幸恵は日本語に訳しているが、それはふくろうの鳴声なのだ。
森の生きものの音を聞きとることができないぼくらは、森をこわして宅地スラムを作らなければならないのだろう。
そして今日、長女のヤイカは、そんな文化

の元締めである東京へ旅立とうとしているのだ。

汽車は一時十七分である。一時のチャイムといっしょに、ぼくは早退をしてきた。教員住宅まではすりて三分。そこから駅までは、いて五分。残る九分をどう使うか、そこまでぼくは考えていない。命が九分の残りだったとしたら、ぼくはどうしているだろう。

玄関のドアを開けると、アタッシュケースとこうもりダーバッグが上りがまちを占めていた。靴をぬぎ、荷物をまたぎ、たてつけの悪い居間のドアをすべらせると、ベランダのガラス越しにセイカの姿が見えた。捨て犬だったマルが、庭でセイカにじゃれている。

ソファーにすわり、ぼくは煙草に火をつけた。途中でもみ消し、ぼくはベランダに近づく。ガラスを軽く叩くと、セイカとマルがぼくを見た。

「時間だぞ」

「うん」

ヤイカの手がマルから離れた。後を追うマルの首のくさりが張り、足が土をかいた。マルの物音にヤイカは振りかえらない。

たたきに立ち、ヤイカは二本の手を二つの荷物に出した。

「一つ持つ」と、ぼくはアタッシェケースに手をやった。

二人は黙って駅へ向かう。

「お金、いくら持ってる」と、ぼくは言葉を探して話しかけた。

「ママから五万円もらって、後、ヤイカのためにお小遣い」

「それだけあれば、まあ、いいな」

「うん」

話がとぎれ、ぼくはまた言葉を探す。

「ヨッヤとりゃう、何かしゃべってたか」

「行ってらっしゃいって、言ってたよ」

「行ってらっしゃいかと」ぼくは笑った。中学生の妹と弟である。学校へ出ていくものが朝はまだ残っている姉へ言うのには、ぴった

りした言葉ではないようだ。それでもまあ、ありれの言葉を言っただけ、ましと言えばましなのかもしれない。

踏切の手前でヤイカは不意に左へ折れ、ぼくはヤイカの後についた。テラノカットの短いかりあげ、シーンズのジャンパー、ふくらみのついたクレーのズボン、ヤイカの風俗はすでに東京にならっている。

材木を積んだ土場のまばらな雑草を踏みつけ、線路をまたぐと、小さな駅舎の横手に出る。夜ふかしのヤイカは、この近道をえらんで、朝食もとらずに通学列車にかけつけていたのだ。夜ふかしは勉強のためではなく、深夜放送のためである。

汽車を待つ失望は、二人しかいなかった。空いた椅子にアタッシュケースをおくと、ぼくは出札口の前で財布を開いた。

「静内、二枚」

たった一人の駅員が、鋏を入れて切符をよこす。静内は下りの汽車で一つ隣の駅であり、

セイカの通った高校のある町だった。上りの急行に乗るためには、急行のとまる静内へ行かなければならない。

改札口のガラスを駅員が開けた。ぼくらの後に駆けつける客はいない。

二輌編成のシーセルが、のどかにホームに近づいてきた。がら空きの汽車に向きあってすわると、ぼくもセイカも窓の外に目をそらした。

低い家並みが窓の外をきりだす。家並みはすぐに消え、海が現われた。絶え間なく波のうねりは、しぶきを運んで引いていく。都へ都へとうねりながら、砕けては引いていった。

我が家の歴史をひきついで、セイカは今、新しい波なのだろうか。

ぼくの家に残る古びた家系図をさかのぼると、六左衛門という男に辿りつく。明治二癸巳年四月十八日江ノ三丁平 勇州造船浦ノ産

という文字が記され、その見子の沿左衛門には江戸ノ産ロと書かれている。

祖父の地を、ぼくはゾウへイウうとまえ人でいた。教科書程度の日本地図の上にゾウはなく、長い間、そこはぼくにとっての気がかりな地であった。

[illegible]車が[illegible]、舗装道路が野にも山にものびるようになった。ウイーウうのぞくある日、ぼくは札幌の書店で各県の道路地図コーナーを見つけた。

三重県の地図を取り、ぼくは音を殺してそれをひろげた。ばらまかれた地名の中から、四日市港ロがぼくの目に飛びこんできたとき、ぼくの足はもうシンへ向かって歩きだし、ぼくの手は音をたてて地図をたたんでいた。

その年の夏、ぼくは家出で旅をした。セイカがいま数の六年まのときである。

「よ、う、こ、そ」

2

駅の正面に高くとかかげられた看板を見あげながら、リュウが声をだした。
「伊勢へしと、ヨッキがはずんだ声をつなげる。
「伊勢へだよ」と、セイカがすかさず言った。
「伊勢ジャ？」と、リュウはぼくの顔にまんまるい目をやった。疑が悪くならないために、風呂だけは欠かさず続けて入りつづけてきたぼくである。

恵子が声をたてて笑った。ぼくも笑う。セイカが笑い、わけも分らずリュウが笑った。
「行くか」と、ぼくは大きなバッグを二つ握り直した。
「どっちで」と恵子が言った。
「あっちじゃないかな」と、ぼくはあごをやった。アーケードのかたわらから、バスが一台うごきだす。
八月の光がまぶしかった。むれを気が、冷房車からおりてばかりの体に粘る。バッグ

のトの車のきしみにいっそう暑さを感じながら、ぼくはみんなの先にたち、アーケードの日陰に向かって急いだ。

バスの路線をあらわした札の番号が見えてくる。人の流れに押されながらアーケードの下に届いたぼくたちは、一つのかたまりとなって立ちどまった。

デパートの前である。入口を入ってすぐの所に、バスの切符を売る窓口があった。

「時間を見てくるから」と、ぼくはハンカチを手を離した。

窓口の上の路線図を見あげて、ぼくは地図という文字を探した。入り組んだ路線図の中から、その文字がすぐに目に飛びこんでくる。ぼくたちの泊まる賛浦は、その一つ先だった。

「賛浦。大人二枚、子ども二枚」

ぼくは、さも買りなれたかのような口ぶりで言うと、財布に手をやった。

「千八百円です」と、窓口の向こうから女の

声がもどる。つりといっしょに切符を受けとると、ぼくは声を落してたずねた。

「バスの時間は、こんど何時ですか？」

「十一時三十分です」

つぶやくもしと言いながら、ぼくは腕時計を見た。針は十時を過ぎたところである。

エスカレーターに乗って、ぼくたちはデパートの食堂へ行った。朝飯を食べずに、前夜の宿泊地である津を発ってきたぼくたちなのだ。

食事をとり、外へ出ると、バスの乗場には行列ができている。ぼくたちは、あわてて行列の後ろについた。ぼくたちの後ろにも、たちまち行列はつながっていく。

バスがきた。もまれながらバスに乗ると、座席はもう人でいっぱいだった。恵子は両手のスーツケースを通路におき、子どもたちをその上にすわらせた。すわった子どもの体のまわりに、客はさらにつまってくる。

バスは動きだした。これからおよそ二時間

の長い道のりである。終点はそこからもっと先にある神州浦なのだ。

ぼくのすぐ後ろで、娘が三人おしゃべりする。早口の土地の言葉は聞きとりにくいが、どうやら喫茶店の品定めをしているようである。

パン、パン、パン——白糸の滝の売店で買った民芸品の鉄砲をリュックから抜きだし、りゅうが鳴らしはじめた。鉄砲は娘たちのおしゃべりのリズムをとるかのように響いている。

りゅうちゃん、うるさいよしと恵子の小さな声がして、鉄砲の音はとまる。

うるさいのは、ぼくの後ろのおしゃべりである。おしゃべりの中身は、パーマ屋の品定めに変わっていた。怒ってはいけない。それもくらしの一つなのだ。

パン、パン、パンと、りゅうがまた鉄砲をうつ。

だ、めしと、恵子の言葉は節切れていた。

町が過ぎ、田園がたちかる。田園の遠くの山々が次第に距離をせばめ、バスをかこむころ、娘たちはおしゃべりはようやく間をおいてきた。りゅうの鉄砲もほとんどならない。

伊勢を発ち、もう一時間はたっていた。しかし、おりる客はほとんどなく、子どもたちたけがようやく空いた席にすわっていた。

ぼくの前においた車つきのバッグが、急に重さを足につたえる。足をよけると、バッグは車の音をきしませながら、ぼくの横を後ろへ向かってすべりはじめた。ぼくはあわててバッグをつかみ、元にもどした。急な山坂をバスはのぼりはじめたのだ。

左手の谷が次第に深くなっていく。谷の向こうで山々は入道雲のようにそびえていた。急なカーブを曲がるたびに、近くの山は不意に遠ざかり、遠くの山は不意に近づく。

まわりきれずにバスが止まった。バッグをし、ようやくカーブをまわったバスの動きに、どよめく者は誰もいない。乗客。たちにとって、

道ははじめてのものではないのだろう。宿の里帰りの人にで、いつになくバスが混んでいたということを、ぼくは後で宿屋のおばさんに教えてもらった。

ぼくの足に寄りかかっていたバッグの重みが軽くなり、バッグは前にのかってすべりだした。ぼくはまたあわてて手をやった。板は下りになったのだ。

海よしに、ぼくの前に立っている恵子が乗りこむ。ぼくは首をかがめて前を見た。入り組んだ海岸線が、けわしい山の緑をかってゆる。海岸線に沿ったわずかな平地に、村が一つ見えていた。

遠方加と、ぼくの言葉はずんでいた。

つぶやくと、恵子の声にはずみがありが、それは仕方のないことだ。三日前、彼女は念願の富士山と出会い、私の目的をもうはたしていた。

「遠方の次なんだよ」と、ぼくは地図の知識をひけらかし説明している。

長いトンネルにバスは入った。トンネルを出ると見晴らしは消え、せまい道路の両側から、家々のたたずまいが現われてくる。村は消え、緑がまた窓をふさいでいた。山の緑と見合った深さで、海の緑が現われる。島のような対岸を背中にした食堂の看板が近づいてくると、バスはスピードをゆるめた。ぼくは窓の外をたしかめる。相生の地の入口には、中学校があるはずだ。彼らから送ってもらったパンフレットの写真のとおり、コンクリートの白い建物が、手に現われ、バスはとまった。

パン、パン、パンと、りょうの鉄砲がめざめる。一方通行のせまい道を、バスは慎重で止められていた。向こう側から次々に車がきってくる。スピードを落し、バスのかたわらを過ぎていく車にのかって、りょうは窓わの席から鉄砲をうちつづけた。

トゥリーが現われる。遠近手はりょうの鉄砲に気がついた。大きな声をペロリと出し、

運転手はトランクをさらせていった。
ぼくの後ろの三人組のおしゃべりもめさめはじめる。めざめは苦くみ、活気はない。どうやら私の悪夢のようだ。
信子が変わった。バスは動きだす。民宿がつづいていた。民宿と民宿がぶつかるほどに近く建つ家々は、またたく間に後ろへ消え、バスはなをのばして賀浦へ急いでいた。あっけない視界の地である。
なはすぐ下りになった。高い堤防がぼくの目から海をさえぎる。堤防と向きあって、家並がつづいていた。旅館、民宿の看板が、家並の中にめだっている。
バスが止まり、かなりの人数にまじりながらぼくたちはおりたった。三人組もここでおりる。彼女たちの曲がっていく目の前の小路の角に、清月旅館という看板をかかげた建物があった。敷地内の給仕で予約をしていた旅館なのだ。
民宿のちいさな二階建ての建物である。急

な階段をのぼり、その二階に通されると、「ワーッ！」と、子どもたちは廊下の手すりにかけよった。地防の向こうに海が見えた。海に声をあげたのだろうか。

岸に入ったのは手すりたった。そこにつかまり、足をかけ、あげくのはてにはその上から、廊下に向かってはねおりる子どもたち。

「おりて、将棋しようと」と、恵子が子どもたちを呼ぶ。

「しようと」、一番先に手すりから離れたのはセイカである。

「しようとヨッキが離れ、「マッテー」とリュウが離れた。

将棋の駒の入った箱を、恵子は将棋盤の上にふせた。箱を取ると、駒の山が盤の上に残る。

「これをね、一つずつ取っていくのと言って、恵子はしゃがすその一つの駒に指をあてて、そっと引いた。

「ほかの駒がくずれたら、次の人と交代する

くびよ。ほれ、りょうちゃんからやってみな」
りょうが指を突きたすと、駒の山は崩れた。
「失敗だアしと恵子が言う。代わって出した
ヨッキの指をりょうの手が強くはじいた。
「なにさあしとヨッキがふくれる。
りょうちゃんのしと、りょうは体で駒をお
おった。駒が大きな音をたてる。それより大
きな声をあげて、ヨッキは泣きだした。

「パパア！」
ふりかえって見あげると、二階の手すりに
つかまるみんなの姿が見えた。ぼくは手をふ
った。手すりの四人もぼくに応える。一時を
賛浦ですこし、ぼくは祖父の地に出かけるの
だ。子どもたちは賛浦で海しぶをするのだと
いう。
朝とはいえ、北のはてのぼくにとって、南
の日射しはするどかった。バスの時間までに
は一時間もあるという。それを待つことがで

きないぼくは、さほどの距離がないことを、きのうの八丁で確かめていた。

家並が切れ、道はのぼりになる。海に突き出た崖は相生の村を隠していたが、坂をのぼれば目の下は村のはずである。

「三百年、三百年」と、ぼくはうわごとのようにつぶやきながら、急な坂をのぼっていった。

坂のてっぺんから、海が少しずつ姿を見せる。目の下に、きのうの瓦屋根のつらなりが浮かんだ。大きく息を吸いこむと、ぼくは走りだした坂を下った。

下りきったところに、寺がある。通りかかった村の娘にぼくはたずねた。

「ここのお寺は、西光寺でしょうか？、海蔵寺でしょうか？」

「西光寺ですが」

「海蔵寺は、どっちの方ですか？」

「そこの道を行くと、オトリバがあって、オトリバの先ですけど」と、娘は二つに分れた

道の一つを指して言った。

オドリバの意味は分らなかったが、指の方向は分る。礼を言って、ぼくは歩きだした。

西光寺は真宗、海蔵寺は、白井家の宗旨、浄土宗なのだ。そんな資料も、ぼくは地元の役場からすでに郵便で手に入れていた。

堤防がある。五色の幕をはりめぐらせた櫓が近くにたっていた。盆踊りのかけ、ここがオドリバなのだ。

堤防に沿った細い道を歩いていくと、石段の上に寺があった。石段をのぼりつめると、せまい境内がある。境内のすみには物置が建ち、寄進者の名前を書きつらねた板が打ちつけてあった。ぼくは近づいて目をやった。向井という姓が板にはめたつ。

アのあく音が庫裡の方でした。古びた本堂に続いている真新しい庫裡から、袈裟をかけた老人が出てきた。寄まわりに出かけるのだろう。寄進をたのもうぼくに住職は横目をくれると、下駄の音を響かせて石段をおりて

いった。

寺の後ろの山の上に墓石のいくつかが見える。庫裡の横手に道を探して、ぼくは山をのぼった。苔だらけの墓石にまじって、つややかに光る墓石もある。ここにあるはずの戒名を、ぼくはメモ帳を片手にして探しはじめた。向井家という文字はいくつも石に刻まれていたが、めあての戒名はないようだ。無縁の墓として、いつかの時代にかたづけられてしまったのだろう。

墓石に水をかける家族づれの姿がめだつ。人目をさけ、ぼくは墓場のすみの草の上に腰をおろし、目の下の海をながめていた。

海岸線はジグソーパズルのように入り組み、ぼくの目から遠近感を喪失させる。陸続きの遠い土地が島のように目近かに浮かぶ風景のからくりにたぶらかされて、河村瑞賢も高つたのだろうか。鶴浦の先にある東宮で生まれた彼は、十三才で江戸に出る。向井六右衛門と同時代の人間であった彼は、奥羽地方と江

アさ結ぶ太平洋の海運を発達させて、世界にその名を留めている。江戸も奥羽も、彼が幼ない目で親んだこの勢州の風景のように、目近にちらばる陸だったのだろうか。そんなふうに、六尺褌も帆を張って江戸へ出たのだろうか。……

「段ものはってもとってくる仕職の姿が見えた。ゆっくりと、ぼくは山をおりた。

「ごめんください」

庫裏の玄関から声をかけると、まだ発芽をかけたままの仕職が顔をだした。

「こちらは、海蔵寺さんでしょうか？」

「そうです。」

「あのう、わたし、北海道に住む母という者ですが、御住職の姿がここにあるということでたずねてきたんですが……今、姿が見えてみましたら、姿は見つかりませんでしたが、こちらにある過去帳を見せていただけないでしょうか……」

「ほう、御住職さまは、何という御方ですか

て」

「クジ。二年に近アで死んだという、向井氏。衛門です」

「クジ。二年」と、住職は復唱した。

「そうですか。さあさあ、まずおあがりください」と言葉をつづける。

大きな家屋敷のまわる書院にぼくは通された。襟をぬいだ住職は、分厚い数を手に持って入ってくる。

「クジ。二年というと、これに書いてあるはずですが。どうぞ、ごらんになってください」

住職は、ぼくに巻帳をさしだした。指すいものはし、ぼくはそれをめくった。

「ああ、ありました」

信蓮法山信士という戒名を見つけて、ぼくは言った。

「ことれとれと住職がのぞく。『向井氏通六衛門』と、小さくトに書いてある。

六左衛門の息子、治左衛門の戒名もあった。『中西六左衛門所』という小さな文字がそえ

られてある。

「ほう、中西六左衛門」と信蔵はいった。

「御存じですか？」

「この辺の寄進者なんですよ。本堂は中西六左衛門が建てたままです。千石船を持って、千石蔵をやっていた人のようですねえ」

「ははあ、すると、その中西さんの所で白井治左衛門は働いていたんでしょうかねえ」

「そういうことになるんでしょうかねえ」と二人の会話は夢の中だ。

ぼくはまた過去帳をめくる。

尊誉信女　慶安四卯四月十六日

白井六左衛門伝ヨ法山ノ母

ぼくの家の記録にはない、六左衛門の母である。

「この過去帳より古いものがもう一冊あったそうですが、昔、火事で焼けてしまったそうでしてねえ」と信蔵はいった。

空が近くなってくる。いときを告げるぼく

をひきとめ、住職は振りすしをごちそうしてくれた。割箸の袋には贅沢という文字が刷られてある。

昔は恵方の方が、贅よりも栄えていたんですけどねえ、今じゃあ、すっかりすたれてしまいましたし」

住職がコタシカウロと言う時、強いアクセントがはじめの母音にはたらいていた。ぼくが意味に言う時、アクセントはのっぺりと抜けている。

ぼくと同じように教えをしていたという住職の思い出話に耳をかたむけた後、ぼくはいとまを告げ、石段をおりた。

オトリバを過ぎ、小さな雑貨店の前を通りかかると、うすぐらい店の中から出てくる子どもづれの母親がいた。

「あっ、パパだよ」と、セイカがぼくを見つける。

つまらのあしと、ぼくは言って。

コバスにのってきた人たちと、りょうが合

える。

「今、ここでヨツキのパンツを買うたの」

恵子は笑いながらうると、声を殺して言葉をつづけた。

「ここのパンツ高いわア。四百五十円もするの」

「きれいなパンツたよ。もようがついてしてセイカはねたましそうた。

「セイカは買わなかったのかー」と、ぼくはセイカにたずねた。

「うん、たってセイカのパンツ、そんなに汚れなかったんたもし」

「油で汚れちゃったのよ。海小者も油でベタベタ。港には船が一杯いる人たもの」と恵子が口をはさんた。

「ヨツキはてこと、ぼくは恵子にたずねた。

ヨツキ一人がみあたらない。

「桶屋におりてきたわし」

「ひうしてー」

「将棋で遊んでいたいんですってし」

「郵便物がいっぱいかうなあしと、ぼくは笑って言った。笑ってしまっていいのだろうか。敵の襲撃から遠ざかり、平和を楽しむヨッキなのだ。

「お寺に行ってきたって」と恵子がたずねる。

「うん」

「西光寺って」

「いや、海蔵寺」

「なぁ人だ。宮尾のおばちゃんからね、西光寺の庫裏さんは向井っていう人だって聞いてから、あんたに教えてあげようと思って来たのに」

寺での生活を送りたいから、ぼくはずきはいめた。停留所がある。バスの時間を調べるため見た。

「まだ一時間もあるわ」

「すごいよ」と、ぼくは言って。

「暑いなぁしと、恵子はぼくの意見に賛成ではない。

「すぐ着くよ。昔はみんなあいてんだ。ぼくを歓迎した別に、ぼくことくらいつまあ

ってくれた」

「居して嬉かったわ」と恵子は笑う。

ぼくたちは、村の外れの墓地をのぼりはじめていた。

「ねえ、家のおばさんと話していてね、分ったことあるんだけど、